東京都小学校国語教育研究会研究主題

他者と協働し、豊かな言語生活を実現する国語学習

―学びを通して身に付けた言葉の力を日常生活で生かそうとする―

読むこと部　研究主題

自立した学習者を育てる読むことの指導

第４学年国語科学習指導案

単元名　ごんと兵十の気持ちの変化に着目して読み、物語のみりょくや結末についての感想を伝え合おう

学習材名「ごんぎつね」（光村図書　４年）

第１会場　品川区立大井第一小学校
日　時：令和８年２月20日(金)５校時
児　童：品川区立大井第一小学校　第４学年松組　29名
担　任：品川区立大井第一小学校　教諭　片岡　今日子
指導者：品川区立城南第二小学校　主幹教諭　春原　亜希

第２会場　台東区立松葉小学校
日　時：令和８年２月20日(金)５校時
児　童：台東区立松葉小学校　第４学年２組21名
担　任：台東区立松葉小学校　教諭　佐藤　泉月
指導者：葛飾区立堀切小学校　主任教諭　下山　美佳

1　単元の目標

○様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、語彙を豊かにすることができる。
〔知識及び技能〕(1)オ

○登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像することができる。〔思考力、判断力、表現力等〕C(1)エ

○文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつことができる。
〔思考力、判断力、表現力等〕C(1)オ

○言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。「学びに向かう力、人間性等」

2　単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
①文章から気付いた言葉により、様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増やし、語彙を豊かにしている。((１)オ)	①「読むこと」において、登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像している。(C（１）エ) ②「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもっている。(C（１）オ)	①場面の移り変わりと結び付けて文章を読み、登場人物の気持ちの変化などについて、学習課題に沿って考えや感想を伝え合おうとしている。

3　単元構想

(1) 児童について（児童観）

・第１会場

　本学級では、読書をすることが好きな児童が多く、絵本や小説、ミステリー小説等、幅広い読書活動を継続的に行っている。これまでに「白いぼうし」や「一つの花」等の文学的な文章を読む活動を通して、登場人物の気持ちを想像する経験をしてきた。友達と考えを交流することが好きな児童が多く、積極的に考えを伝え合い、学びを広げられる児童が多くいる。

・第２会場

本学級の児童は、学習課題に沿って読んだり書いたりすることや自分の考えをまとめることが好きな児童が多い。一方で、目的をもって交流し、友達の考えを自分の考えに生かしたり、本に親しんだりする姿には大きな開きがある。

そこで、本単元では、自分の考えを友達に話したり、友達の考えを聞いたりすることを通して多様な考えに触れ、自らの考えを深める学習活動を毎時間取り入れていく。物語について自分では気付かなかったことに気付いたり、自分にはなかった価値観に触れたりすることを通して、作品の世界をより深く味わうことにつなげ、自身の物語の読み方や楽しみ方を広げていけるよう、単元を展開していく。

(2) 学習材について（学習材観）

「ごんぎつね」は優れた情景描写や登場人物の気持ちの変化などが的確に表現されており、児童文学の名作として長年教科書に掲載されている作品である。４年生という発達段階にもふさわしく、叙述を基にして、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などを想像し、他者と交流する中で、互いの感じ方の違いに気付かせる学習を行うのに適した学習材である。児童が登場人物の変化を捉えるには、作品の冒頭で登場人物がどのように紹介されているかを正確に読む必要がある。その上で場面の展開に応じて表現されている情景描写や登場人物の気持ちの変化の叙述に着目しながら、読みを進めることが大切である。

(3) 単元について（単元観）

本単元では、児童が意欲的に読み進め、主体的な学びとなるよう、初読後の感想を生かした単元づくりを行う。「構造と内容の把握」では、登場人物の行動や情景描写などを丁寧に扱う。「精査・解釈」の学習過程では、登場人物の気持ちの変化や性格、情景を具体的に想像することを主軸とする。特に、発問を工夫することで、ごんと兵十の気持ちのすれ違いや、関係性について、文章全体の複数の叙述を根拠に気付かせることができる。物語のクライマックスでは、多くの児童が心を動かされ、作品の捉え方に違いが生まれる。そこに「考えの形成」の学習過程を意図的、計画的に設定する。さらに「共有」の学習過程では、物語の結末についての考えをもたせ、他者の多様な見方や考え方に触れることで自分の考えを深めさせたい。

また、物語の魅力について、一次から二次で触れてきた「人物の気持ちの変化」「情景描写」「色彩表現」「冒頭の語り」「意外な結末」などの観点を意識して伝え合うことで、物語の様々な魅力や楽しみ方に気付くことができるようにしたい。

４　研究主題に迫るために

※読むこと部全体の研究については、別紙（読「研究部」1-2）の資料を参照。

(1)　「言葉による見方・考え方」を働かせる学びをつくる。

目指す児童の姿：①「読み方」を意識して読む

○　学習材分析表の作成

本単元の学習材分析表において、学級で話し合った大きな問いである「『ごんぎつね』のお話のみりょくや最後の結末についての感想をまとめ、話し合う」ために、小さな問い①「なぜ、ごんはいたずらばかりしているのか。」②「ごんはなぜつぐないを始め、くり返したのか。」③「引き合わないと思ったのに、なぜその明くる日もつぐないを続けたのか。」④「ごんと兵十は分かり合えたのだろうか。」を位置付けている。その小さな問いに対して、「読みの観点」である、「人物の性格」、「行動」、「会話」、「気持ち」、「情景」、「語り手」、「場面の様子」がどのように用いられ、「整理する」、「比べる」、「見直す」、「つなげる」などの「整理分析の方法」がどう位置付けられているのかを学習材分析表にまとめ、一目で分かるようにした。

本単元で育てたい読むことの力と見方・考え方		
読むことの力	読みの観点	整理・分析等の方法
・様子や行動、気持ちや性格を表す言葉に着目して考える力。 ・登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像する力。	・登場人物の境遇、性格、気持ち ・登場人物の様子や会話、行動 ・場面の様子　・視点 ・情景描写　・色彩表現 ・象徴　・語り手	・比較 ・関連付け ・整理・分類 ・見直す

(2) 児童が（本単元において）身に付けたい力を意識し、自ら学びを進める。

目指す児童の姿：②自ら読み進める

○　単元構成の工夫

本単元では、児童の興味・関心を引き出し、自ら学びを進めるために「出合う→つかむ→問いをもつ→深める→まとめる」の流れを意図的に構成した。

「出合う」…児童の読書への興味・関心や楽しみ方など、これまでの読書経験を基に話し合うことから始める。人によって、読書の好き嫌いや興味のもち方、楽しみ方はそれぞれであることに気付かせ、読書をする際の自身の楽しみ方や読書の幅を少しでも広げたいという思いがもてるようにする。また、教材と出合う前には、新美南吉の「手ぶくろを買いに」を読み聞かせしたり、児童が知っている「きつね」が出てくる物語や「きつね」のイメージについて話し合ったりしてから、「ごんぎつね」という作品に出合わせるようにした。

「つかむ」…本文を読んで場面ごとに「○○なごん」と小見出しをつけたり、ごんと兵十の置かれた境遇や人物像を簡単に読んだりして話の大体をつかませる。

「問いをもつ」…内容の大体をつかんだ上で、初発の感想で気になる言葉や心に残った場面、不思議に思ったことや皆で考えたいことをまとめ、それを基に単元を通して考えたいテーマ（大きな問い）を設定する。感想の内容を整理分類しながら、そこに向かうための小さな問いについて話し合う際には、教師の身に付けさせたい力と、児童の「やりたい」「もっと知りたい」「どうして」を融合させて問いを設定する。

「深める」…「ごんぎつねの物語の魅力や結末についてどう思うか」という「大きな問い」について考えることを通して、それぞれの時間で扱う「小さな問い」について読んだ上で自分の考えをもち、まとめる言語活動を行う。第二次の「問い」に沿った読みの積み重ねを振り返りながら、ごんの葛藤や複雑な気持ち、兵十への思い、結末についての捉え方など、多面的に物語を捉えた上での考えをまとめられるようにする。

「まとめる」…単元末には「ごんぎつねという物語の魅力」や「結末についての感想」を伝え合う言語活動を設定し、これまでの読みの積み重ねから辿り着いた自身の考えをまとめ、伝え合う楽しさを味わえるようにする。

○　「読みのたから箱」の活用　（「7　資料」参照）

叙述を基に児童が自ら読み進められるよう「読みの観点」を、「人物の性格」、「行動」、「会話」、「気持ち」、「情景」、「語り手」、「場面の様子」など児童が分かりやすい表現で整理した「読みのたから箱」を全体で共有する。二次から学級で考えた「問い」で学習が進められていく中で、自分の読みがどのように形成されたかについて「読みのたから箱」に沿って振り返らせる。

また、新美南吉の他シリーズや登場人物の気持ちの変化が大きい物語、動物（きつね）が出てくる物語、意外な結末がある物語など、並行して読書をする中で学んだ「読みの観点」が本を読むことの面白さや物語を味わうよさを感じられるようにする。また、読んだ本を友達に紹介したり、本を手にとるきっかけになったりするよう、ICT 機器を活用した共有の広場に児童が本を読んだ軌跡を自由に残し、いつでも互いに見合えるようにすることで、自らの学びを進める児童の姿を期待している。

(3) 学習活動（言語活動）において、自らの考えをもち、多様な考えをもつ他者と関わり協働する中で、新たな考えをもつ。

目指す児童の姿：③協働的に読む

○　交流の工夫

初発の感想から「ごんぎつねの魅力や結末についてどう考えるか」という大きな問いに向か

うための「小さな問い」について考える時間を設定する。二次で扱う「小さな問い」については、自らの考えをもち他者と対話する毎時間の学習の中で多様な考えに触れ、自分の考えを深めたり広げたりできるようにする。その中でも、第５時・第６時においては、「ごんは兵十に気付いてほしいのか否か」、「ごんと兵十は分かり合えたのか否か」について、自身の考えに合う立場を黒板に名前マグネットで示させる。その後にトリオで交流し、自身の考えを再構築した後に黒板の名前マグネットの位置を動かしてもよいこととする。それにより、自分の考えをまとめ、多様な考えをもつ他者と関わり、協働する中で、考えを確かにしたり、新たな考えに触れ考えを広げたりする言語活動となる。そこでは、結末についての感想や考えを共有した後、「ごんぎつね」の魅力について同じ立場や違う立場の児童同士で意図的に編成したグループで交流する時間をとるようにする。

○　全文シートの活用

自らの考えをもつ場面において、場面と場面を比べたり、根拠となる叙述に線を引いたり、言葉と言葉を矢印でつないだりして活用させる。また、トリオでの交流場面においても、自分の考えを話す際にどの叙述を基に考えたのか、友達と自分の考えを比べたり、根拠となる叙述を比べたりする際に全文シートを活用させる。同じ考えや違う考えの友達の考えを自ら選択して交流しに行く時間には、全文シートと鉛筆のみを持ち、叙述を基に自分の考えと相手の考えを比べられるようにする。そして、新たな気付きを全文シートに追記させ、自身の読みの根拠を視覚化できるようにする。

○　発問の工夫

本単元では、ごんの気持ちの変化をより具体的に、深く考えさせたい。そのために、毎回の問い（主発問）の他に、多様な考えに気付かせるための「ゆさぶり発問（補助発問）」を意図的に投げかける。それにより、考える動機付け、再考する必然性、交流する必要感をもたせ、児童の思考を活性化させる。

〈想定する発問例〉

時	主発問	ゆさぶり発問（補助発問）
３	なぜ、ごんはいたずらばかりしているのか。	いたずらばかりするごんに対して、村の人々はどう思っているのだろうか。ごんのいたずらは村の人々にとって、ちょっとしたいたずらなのだろうか。
４	ごんはなぜ、つぐないを始め、くり返したのか。	ごんは、なぜ今回だけいたずらを後悔しているのか。兵十はどんな様子だろうか。５回のつぐないは、ごんにとって、ただのくり返しなのか。
５	「引き合わないな」と思ったのに、なぜその明くる日もつぐないを続けたのか。	ごんは、兵十に気付いてほしいのか。気付かれたくないのか。
６	ごんと兵十は、分かり合えたのだろうか。	今までの場面と違うところはどこだろうか。誰の視点で語っているのだろうか。
７	「ごんぎつね」の物語のみりょくや結末についての感想をまとめ、伝え合おう。	兵十は、ごんをうった後どうしただろうか。どのような考えや思いから、この物語は語り継がれてきたのか。

(4)　獲得した言葉の力を日常生活に活用し、言語生活を豊かにする。

目指す児童の姿：④言葉や文章を大切にする

○　読むことのよさや面白さに気付く工夫

【関連図書の活用】

「ごんぎつね」を読んでの「問い」について話し合ったり、物語の魅力や結末について感想を話し合う活動と並行して、関連図書を読んだり紹介したりする。読むことの学習において、文学的な文章を読むよさや面白さを十分に味わう活動を通して、新しい読み物や読み方に出合って読書の幅を広げたり、普段手に取らない本にも興味をもったりするなど、読書を楽しむことを日常化できるようにする。

国語の授業で獲得した言葉を日常生活に活用する			
読み方(見方・考え方)が分かる	読むよさや面白さを感じる	進んで、幅広く読書に親しむ	読書につなげる工夫
情景や場面の様子に着目して、それらを比べたり、理由を考えたりしながら読むことで、登場人物の気持ちの変化を想像できた。	・「問い」について話し合ったり、物語の結末や魅力について感想を話し合ったりすると楽しい。 ・関連図書から、読書の幅が広がると楽しい。	新しい読み物や読み方に出合って読書の幅を広げ、普段手に取らない本にも興味をもち、読書を楽しむ。	・ICT 機器を活用した共有の広場 ・学習した読み方を汎用的に生かせる関連図書の紹介・活用 ＊新美南吉の他のシリーズや登場人物の気持ちの変化が大きい物語、動物（きつね）が出てくる物語、意外な結末がある物語

5　単元計画（全７時間）

過程(次)	時	学習活動	指導上の留意点	評価規準　評価方法
第一次 構造と内容の把握	1	1　これまでの読書体験や既習の文学的な文章を振り返る。 2　範読を聞き、物語の大体を捉える。 ＜大まかなあらすじ＞ 一→兵十にいたずらをするごん 二→そうしきを見て後かいするごん 三→つぐないを続けるごん 四→兵十と加助の会話を聞くごん 五→引き合わないなあと思うごん 六→兵十にうたれてたおれるごん 3　初発の感想をまとめる。 【提示する視点】 ・気になる言葉、心に残った場面、疑問、不思議に思ったこと ・読んでどう思ったか	○文学作品の魅力や学習方法を振り返る。 ○アンケート、並行読書、読みのたから箱について触れる。 ○出来事を整理し、行動や気持ちを手がかりに場面ごとにあらすじを捉えられるようにする。 ○物語に対して自分の考えが明確になるように感想に視点を設ける。 ○ICT 機器等を活用し、感想を視点毎にまとめる。 ○分からない言葉は適宜辞書を活用するように指示を出す。	〔知識・技能①〕 ワークシート ・場面の様子や登場人物の言動、様子などを表す語句について着目し、語彙を豊かにしているかの確認

	2	1　感想を基に、単元を通して考えたいテーマを設定する。 ごんと兵十の気持ちの変化に着目して読み、物語のみりょくや結末についての感想を伝え合おう。 2　感想を基に学習計画を立てる。 3　人物像をまとめる。 ＜ごん＞ ・さみしがりや ・いたずら好き ・おくびょう ・村人にきらわれている。 →ひとりぼっちの小ぎつね →中山から少しはなれた山の中にいる。 →夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりした。（畑へ入っていもをほりちらす、菜種がらのほしてあるのへ火を付ける、百姓家のうら手につるしてあるとんがらしをむしり取っていく） →村人に見つからないように行動している。 ＜兵十＞ ・まずしい。 →ぼろぼろの黒い着物を着ている。 ・ごうかい →ぶちこみました。 ・ごんにとても怒っている。 →どなり立てました。	○児童の言葉を生かして設定する。 ○授業で扱う問いを確認する。 ○ごんと兵十はそれぞれどんな人物か、第１場面の叙述にサイドラインを引かせて、手掛かりを見付けられるようにする。	
第二次 精査・解釈	3	1　課題を確認し、学習の見通しをもつ。 なぜ、ごんはいたずらばかりしているのか。 2　本文を読み、叙述を根拠に、課題に対する自分の考えを書く。 3　考えを共有する。 ＜ゆさぶり発問（補助発問）＞ いたずらばかりするごんに対して、村の人々はどう思っているのだろうか。ごんのいたずらは村の人々にとって、ちょっとしたいたずらなのだろうか。 4　学習をまとめ、振り返る。 ・どのような言葉や文に着目し	○読みのたから箱を提示する。「人物の性格」、「行動」、「会話」、「気持ち」、「情景」、「場面の様子」、「視点」、「語り手」などから、想像できるようにする。 ○ごんがした「いたずら」を中心にサイドラインを引き、ごんの思いや村の人々から見た思いを想像できるようにする。 ○考えと根拠を示して話し合うことを確認す	◆読みの観点 ・ごんの境遇や行動、内言 ◇整理分析の方法 ・ごんがした「いたずら」を整理し、ごんの境遇や人物像などと関連付けて心情を想像する。

	てどのように考えたのか。 5　次時の学習課題を確認する。	る。 ○身に付けた言葉の力を自覚できるようにする。	〔思考・判断・表現①〕 ノート ・ごんの様子や行動、気持ちの変化について想像しているかの確認
4	1　課題を確認し、学習の見通しをもつ。		
	ごんはなぜ、つぐないを始め、くり返したのか。		
	2　本文を読み、叙述を根拠に、課題に対する自分の考えを書く。	○読みのたから箱を提示する。「人物の性格」、「行動」、「会話」、「気持ち」、「情景」、「場面の様子」、「語り手」などから、想像できるようにする。 ○ごんがつぐないを始めたきっかけになった部分にサイドラインを引き、前の場面と比べて気持ちの変化に気付けるようにする。	◆読みの観点 ・つぐないを始めたきっかけ ・情景描写 ・ごんの会話文 ・ごんの考え、内言 ◇整理分析の方法 ・ごんの行動や見たこと、会話、内言を比較して深める。
	3　考えを共有する。 <ゆさぶり発問（補助発問）> ごんはなぜ今回だけいたずらを後悔しているのか。兵十はどんな様子だろうか。5 回のつぐないは、ごんにとってただのくり返しなのか。	○考えと根拠を示して話し合うことを確認する。 ○トリオでの話し合い後に、同じ立場や違う立場の友達と交流し自分の考えと比べたり生かしたりすることを確認する。	「立場」の例 ・５回のつぐないはごんにとって、ただのくり返し ・ただのくり返しではない
	4　学習をまとめ、振り返る。 ・どのような言葉や文に着目してどのように考えたのか。 5　次時の学習課題を確認する。	○身に付けた言葉の力を自覚できるようにする。	
5	1　課題を確認し、学習の見通しをもつ。		
	「引き合わない」と思ったのに、なぜ、その明くる日もつぐないを続けたのか。		◆読みの観点 ・情景描写 ・行動、変化 ・会話 ◇整理分析の方法 ・神様のしわざと聞いた場面とそのまた明くる日もくりを持って行った場面の比較
	2　本文を読み、叙述を根拠に、課題に対する自分の考えを書く。 3　考えを共有する。 <ゆさぶり発問（補助発問）> ごんは兵十に気付いてほしいか、気付かれたくないのか。	○読みのたから箱を提示する。「人物の性格」、「行動」、「会話」、「情景」、「場面の様子」などから、想像できるようにする。 ○ごんが兵十と加助の話をどのように聞いているかに着目し、ごんの	

	4　学習をまとめ、振り返る。 ・どのような言葉や文に着目してどのように考えたのか。 5　次時の学習課題を確認する。	兵十に対する思いを想像できるようにする。 ○トリオでの話し合い後に、同じ立場や違う立場の友達と交流し自分の考えと比べたり生かしたりすることを確認する。 ○考えと根拠を示して話し合うことを確認する。 ○身に付けた言葉の力を自覚できるようにする。	「立場」の例 ・ごんは兵十に気付いてほしい ・半々 ・気づかれたくない
6 本 時	1　物語を振り返り、課題を確認し、学習の見通しをもつ。 ごんと兵十は、分かり合えたのだろうか。 <ゆさぶり発問（補助発問）> 今までの場面と違うところはどこだろうか。誰の視点で語っているのだろうか。 2　本文を読み、叙述を根拠に、登場人物の気持ちを想像する。 ①　「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」 ②　ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。 3　考えを共有する。 「立場」の例 ・分かり合えた ・半々 ・分かり合えていない	○結末までのごんや兵十の気持ちを確認する。 ○第6場面は兵十の視点で書かれていることを確認する。 ○本時の問いを解決するために、対人物と中心人物それぞれの視点から気持ちを想像する見通しをもてるようにする。 ○読みのたから箱を提示する。「人物の性格」、「行動」、「会話」、「気持ち」、「情景」、「場面の様子」、「視点」、「色彩表現」、「語り手」、などから、想像できるようにする。 ○これまでの場面と比較して兵十の行動や会話の変化を考えていくように助言する。 ○掲示物（ごんの行動の叙述）やこれまでのワークシートを活用しながらごんの気持ちの変容を考えていくように助言する。 ○考えと根拠を示して話し合うことを確認する。 ○トリオでの話し合い後に、同じ立場や違う立場の友達と交流し自分	◆読みの観点 ・ごんの行動 ・兵十の行動、会話 ・ごんと兵十の行動の比較 ・情景描写 ・ごんの呼び方 ・ひとりぼっち ◇整理分析の方法 ・ごんや兵十の人物像やこれまでの行動と関連付けながら、気持ちの変化を比較したり、つなげたりして深める。 〔主体的に学習に取り組む態度①〕 ワークシート・観察 ・ごんや兵十の気持ちの変化について場面の移り変わりと結び付けて自分の考えを伝え合おうとしているかの確認

		4　本時の問いについて考えをまとめる。 5　学習を振り返る。 ・どのような言葉や文に着目してどのように考えたのか。	の考えと比べたり生かしたりすることを確認する。 ○情景描写に着目させ、表現効果を想像できるようにする。 ○身に付けた言葉の力を自覚できるようにする。	
第三次 考えの形成	7	1　課題を確認し、学習の見通しをもつ。		
		「ごんぎつね」の物語のみりょくや結末についての感想をまとめ、伝え合おう。		
		2　自分の考えを書く。 ・ごんぎつねで見付けた「魅力」 （他の物語と比べて～） ・結末についての「感想」 （自分が～だったら） 3　考えを共有する。 ＜ゆさぶり発問（補助発問）＞ 兵十は、ごんをうった後どうしただろうか。どのような考えや思いから、この物語は語り継がれてきたのか。 4　単元全体を振り返り、学びを日常生活へとつなげる。 ・他の本で気付いた「魅力」 ・これから見付けたい「魅力」	○読みのたから箱を提示する。「人物の性格」、「行動」、「会話」、「気持ち」、「情景」、「場面の様子」、「色彩表現」、「象徴」、「語り手」、などから、視点を設け、考えをもちやすくする。 ○語り出しに着目し、物語の構造や、伝承される価値について考えられるようにする。 ○トリオでの話し合い後に、同じ魅力や違う魅力を感じた友達と交流し自他の考えの違いやよさに気付けるようにする。 ○並行読書で見つけた物語の魅力も取り上げ、読書生活につながるようにする。	〔思考・判断・表現②〕 ワークシート・観察 ・文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもっているかの確認 「魅力」の例 ・登場人物の気持ちの変化 ・登場人物の行動 ・結末 ・色彩表現 ・視点

6　本時の学習（6/7）

(1) 本時のねらい

物語の結末のごんと兵十の思いや変容を、叙述を基に比較したり、関連付けて類推したりして想像する。

(2) 本時の展開

学　習　活　動	指導上の留意点	評価規準　評価方法
1　物語を振り返り、課題を確認し、学習の見通しをもつ。	○掲示物（ごんの行動の叙述）やこれまでのワークシートを活用しながら結末までのごんの気持ちの変化と兵十の気持ちを確認する。	
ごんと兵十は、分かり合えたのだろうか。		
C 分かり合えた。兵十はごんが栗を持ってきていることに気付き、ごんはうなずいているから。 C うたれたから分かり合えていない。 C どちらとも言えない。ごんの気持ちは伝わったのかな。	○分かり合えたのか分かり合えていないと考えるのか、自分の考えを示す位置に名前磁石を貼らせておく。	
<ゆさぶり発問（補助発問）> 今までの場面と違うところはどこだろうか。誰の視点で語っているのだろうか。 C 兵十が出てくる。 C 兵十から見たごんの様子。 C 兵十の視点	○第６場面は兵十の視点で書かれていることを確認する。 ○本時の問いを解決するために、対人物と中心人物それぞれの視点から気持ちを想像する見通しをもてるようにする。	〔言葉による見方・考え方を働かせている児童の姿〕 ・ごんと兵十の気持ちの変容を捉えるために、ごんと兵十のこれまでの行動や心情、関係に着目しながら、叙述を比較したり、叙述から類推したりしている。
2　本文を読み、叙述を根拠に、登場人物の気持ちを想像する。 ①　「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」 C ごんはおれのためにいつもくりを持ってきていたのか。 C また、いつものようにいたずらをしに来たと思ったのに、おれは取り返しのつかないことをした。 C もっと優しくすればよかった。 C 加助や村の人にこのことを伝えよう。でも、あのごんが、どうしておれに？ ②　ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。 C 兵十のためにつぐないを続けたけど、うたれて悲しい。 C 兵十ごめん。うたれても仕方ないことをした。いたずらしなけりゃよかった。 C 仲良くなりたかったな。 C 気付いてくれてよかった。 C 悲しさ、切なさ、後悔など様々な気	○読みのたから箱を提示する。「人物の性格」、「行動」、「会話」、「気持ち」、「情景」、「場面の様子」、「視点」、「色彩表現」、「語り手」などから、想像できるようにする。 ○ごんや兵十の気持ちが分かる叙述にサイドラインを引かせ、これまでの場面と比較して行動や会話の変化を考えていくように助言する。	〔主体的に学習に取り組む態度①〕 ワークシート・観察 ・ごんや兵十の気持ちの変化について、場面の移り変わりと結び付けて自分の考えを伝え合おうとしているかの確認

持ちが青いけむりに表れている。 ３　考えを共有する。 Ｃ 分かり合えたと思う。なぜなら、兵十は、やっとごんのしたことに気付いたし、ごんは、気付いてもらえてよかったと思ってうなずいているから。 Ｃ 最初は分かり合えたと思ったが、兵十の視点から考えたら、栗や松たけを持ってきたのはごんだと分かったが、その理由やごんの兵十への思い（仲良くなりたいなど）までは分からないとも考えられる。 Ｃ ごんは、兵十と仲良くなりたかったのに結局うたれてしまったし、ごんから見ても、兵十から見ても悲しい気持ちが青いけむりに込められているから分かり合えていない。 ４　本時の問いについて考えをまとめる。 ５　学習を振り返る。 ・どのような言葉や文に着目してどのように考えたのか。	 ○考えと根拠を示して話し合うことを確認する。 ○トリオでの話し合い後に、同じ立場や違う立場の友達と交流し自分の考えと比べたり生かしたりすることを確認する。 ○情景描写に着目させ、表現効果を想像できるようにする。 ○身に付けた言葉の力を自覚できるようにする。	 「立場」の例 ・分かり合えた ・半々 ・分かり合えていない

（３）板書計画

ごんと兵十の気持ちの変化に着目して読み、物語のみりょくや結末についての感想を伝え合おう

ごんぎつね　新美南吉

分かり合えた ←→ 分かり合えていない

ごんと兵十は分かり合えたのだろうか。

ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

・うたれて悲しい。
・仕方ない。
・仲良くなりたかった。
・気付いてくれてよかった。

↓今までのいたずら
↓兵十へのつぐない

図
兵十の視点の変化
①うちの中
②土間　くり
③ごん

挿絵
ごんと兵十

青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。

悲しさ　切なさ　後かい

「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」

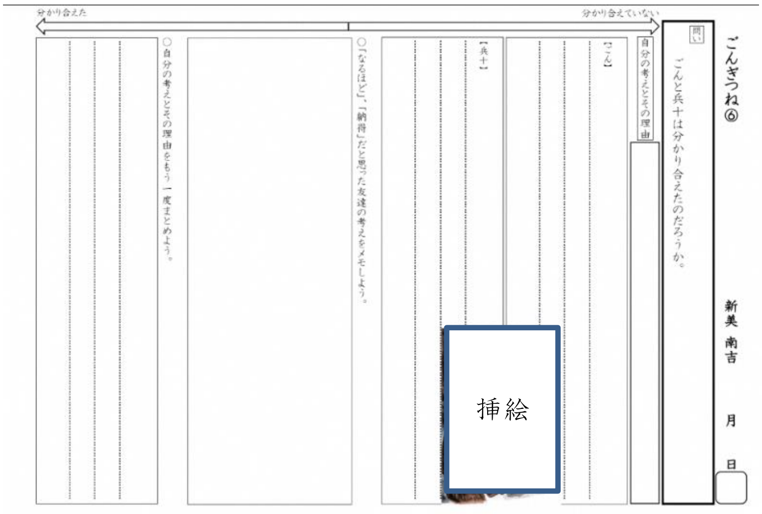
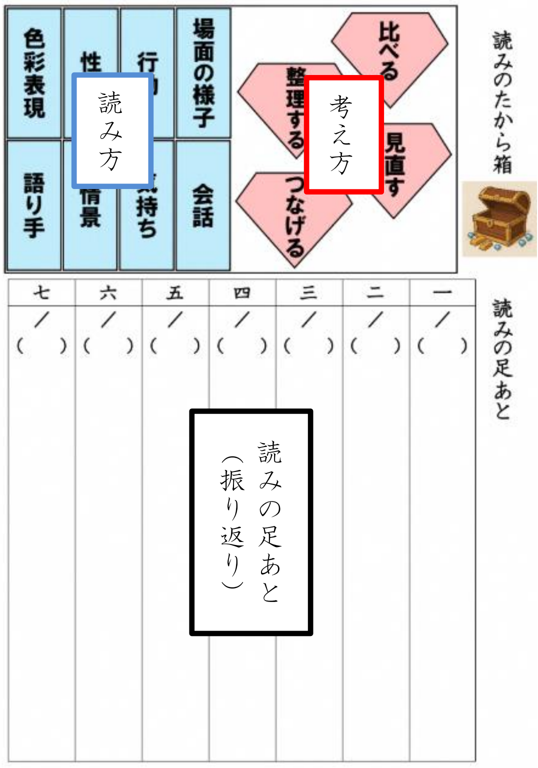
・取り返しのつかないことをした。
・ごんはおれのために。
・もっとやさしくすればよかった。
・みんなにこのことを伝えよう。

ごん ⇔ あのごんぎつねめ　ぬすっとぎつねめ

火縄じゅうをばたりと取り落としました。

7　資料

＜第６時ワークシート＞



＜「読みの宝箱」と「読みの足あと」＞